

希望をもっていた。フロインデインのR子さんやHさんと寮歌を歌ったり、彼女らに将来の夢を語ったりしたものである。人間というものは物質的に恵まれない生活をするほうが、ある種の精神的高揚がおこり、かえってロマンティズムや未来への理想を強く抱くようになるのかも知れない。私にとって全く新しい、そして、大陸とくらべてきわめて異質であった環境の中の松高生活三年間が、私の人生の中で殊の外凝集した中味をもっているという実感は35年経った今、かえって強くなっている。(松山高等学校同窓会「真善美」1984)

「M先生宅の下宿」

「君、僕の家に下宿しませんか。玄関脇の四畳半の部屋が空いていますから」と、三年進級を控えた昭和24年春休み前のある日、M先生に校庭で声をかけられた。東大文学部出身のM先生は西洋史を教える先生であった。当時三十代なかばであったろうか、白せき瘦身、いかにも第一線の研究者という風貌であった。そして先生は理科生であった私の指導教官でもあった。

思いもかけぬ先生のお誘いに、私は戸惑った。下宿で先生と顔を合わせ、勉強せよとお説教されるのはかなわぬ。どうしたものかと数日考えた。友人たちは冷やかし半分に、「お前は見込みがあるからお声がかかったのだ。ぜひお宅に下宿しろ」などと言う。東京出身のご夫妻には子供がなく、先生より十歳は若い夫人は、まだ少女の面影を残した知的美貌の持ち主であって、当時の悪童高校生の間では評判が高かった。

私の高校、それは旧制の松山高校であった。なにかといえば漱石、子規、虚子が引き合いに出される土地柄、生意気盛りの松高生どもの話題に先生の奥様のことが出て、「坊ちゃん」のマドンナでもとてもかなわないだろうという評価であった。今にして思えば友人たちの本音は私に対する羨望だったにちがいない。

当時、多くの旧制高等学校では、入学すると、クラス担任のほかに生徒それぞれが「指導教官」をもつという制度があった。一身上のことでも相談に乗って頂くのがおもな目的ということであった。おそらくもっと重要なことは、スレスレの成績のときに、教授会で救済の弁護をしてくれるのが指導教官の役目である、という先輩からの伝授であった。そこで、多くの生徒は自分の苦手とする学科の担当教授に指導教官をお願いに行くということになる、と聞いていた。事実、多くの不合格者を出すことで有名な数学のある先生に指導教官を頼みに行く者がお宅に目白押しというありさまであった。私は、あまのじゃくの性向なのか、友人たちがあまり頼みに行かない教授に指導教官をお願いしようと物色していた。

もちろん、理科生で文系の先生を指導教官にもつ者は全くいなかった。私は、多少歴史に関心があったので、指導生をあまり持っておられなかったM先生をお願いしたところ、簡単に引き受けて下さった。以後、一年、二年の学年末が来るたびに先生宅に呼ばれ、「危うく落第するところでしたよ。もう少し勉強しなさい」と言われても、奥様のすすめて下さるお茶とお菓子を頂きながら、進級出来たのだからこれで充分と、先生のお説教をうわの空で拝聴していた。

このように、ごく一般的な指導教官と指導生の関係であったので、お宅に下宿せよという先生の真意を理解しかねた。要するに、指導教官としての責任を果たすため、この出来の悪い、ぐうたらな理科の指導生の尻を叩いて卒業させ、大学に合格させようとの意図によっている、

と私は理解した。いずれにしろここに至っては、勉強プラス美人奥様の顔を毎日見るか、はたまた過去二年間のように気楽に音楽を楽しみ、道後温泉に入って適当に勉強しようか、のいずれかに決断を迫られる羽目になった。

そして間もなく私は、わずかな身の回りのものを、借りものの手押しのリヤカーにのせて先生宅の四畳半に引っ越した。

先生のお宅は学校の運動場から道後温泉に向かう道の途中にあって、始業の鐘が聞こえてから出掛けても授業に間に合うほどの便利な場所であった。一年のときは寮、二年のときは下宿を転々と、当時の乏しい食糧事情のもとではあったが、その二年間気儘に高校生活を送ってきた私は、来るべき最後の一年はかなり厳しいもので、それもわが人生には大切な経験となるいい機会だろうと自ら言い聞かせて一応の覚悟を決めてのことだった。

当時、寮生だけでなく、多くの下宿生は寮の食堂で貧しい食事をしていた。私も三食サツマイモやスイトンだけの食事をし、夕方学校の授業の終る頃合を見計らって下宿に帰るようにしていた。先生宅に移って間もなく、先生が廊下から「僕の部屋にお茶を飲みに来ませんか」と、声をかけてくださった。「それ、おいでなすった」と、予期はしていたものの、覚悟を決めて先生の和室の書斎に伺った。書棚には本がぎっしりという、いかにも学者らしい威厳のある部屋で、そこでは先生の権威が一段と高いように思え、私は身のすくむ思いで緊張して座った。あの奥様がお茶とお菓子（カンコロイモといって、当時としては貴重なサツマイモの菓子のようなもの）をすすめて下さる。

緊張してかしこまっていると、「君、フランス革命を知っているでしょう」と、意外な話題。いぶかしい気分で「はい、中学で少し習いました」と答えると、「歴史はとても面白いですよ」と仰しゃる。西洋史の先生だから、そりゃそうだろう、と思いながら先生の話の続きを待った。いつ私の成績のことに話題が転換するかわからない。しかし、その日は全く拍子抜けをした。先生はフランス革命のときのルイ十六世とマリー・アントワネットの話に終始し、落ち着いたバリトンの声であたかもご自身彼らと一緒に居たかのような話し振りであった。あとで寮時代の文科の友人に聞くとところによると、M教授の「歴史的現在形の講義」は有名だそうであった。それから数日ごとに先生は私をお茶に招き、ヨーロッパの歴史の話しをして下さった。ときにはいろいろな書物の文献や写真を見せて下さったりしながら歴史的現在形で語る先生のお話しに魅せられ、いつの間にか私は先生のお呼びを楽しみに待つようになっていた。もちろん、そのたびに奥様の甘いソプラノのお声を聞くという喜びの付録もついて。先生の話は次第に十九世紀から二十世紀に入り、バイエルン王のことやハプスブルク家の盛衰、普仏戦争とドイツ統一、第一次世界大戦、そして第二次世界大戦へと発展していった。私はいつしか理科生としての成績や大学進路のことは念頭から去り、半年ほど過ぎていった。

今でも記憶に残る先生の教えは、「本に記載された事実だけを鵜呑みにしてはいけません。ものの見方にはいろいろあることを知るのが本当の科学です」ということだった。なぜ私が授業料ただ同然の当時の高等学校で、ドイツ現代史の権威M教授から個人教授を受けるという幸運に恵まれたのか、まさに人生は運であろうか。この時教えられた、真実に近づくのはこのように物事を批判的に観る態度が必要だ、ということは後で研究生生活に入ってから改めて認識した。

戦時中の中学生だった私は、どちらかというと軍国少年であったが、戦争が終ってみればすべての価値が逆転し、精神的に混乱状態に陥っていた。当時の同級生たちには軍関係の学校から編入した者も多かったので、皆新しい民主主義の時代に順応するには大なり小なり苦勞があった。しかし、高等学校の寮生活は、この変換期における将来の人生や天下国家を論ずるにはいい環境であったし、指導教官制度のおかげで先生との距離が近かったことは、当時の私たち20歳前後の青年にとって無上の経験であった。この経験は私たちに、客観的に物事を観る姿勢を獲得し、自らの判断力を養う貴重な機会を与えてくれたように思える。豊かな戦前の時代とは違い、旧制終末期の物資不足の高校生活であったが、それでも個性尊重をモットーとし、自由な気風や、先生と生徒の間の人間関係の緊密な、いわばマンツーマンに近い教育方針は存在していた。生徒の数も限られており、現在のマスプロ教育とは違った旧制度教育の得難い良さが残っていたように思う。

私たちのクラスは旧制最後で、一年あとのクラスは、私たちが三年生になったとき、ひと足さきに新制大学生になって学校を去っていた。足元に火がつくとはこのとで、もし旧制大学に入れなかったら、留年もできないという不運な旧制最後の高校生であった。いくら私が呑気でも、秋には大学進学を真剣に考えなくてはならなかった。当時は日本人として初のノーベル賞を受けた湯川秀樹博士フィーバーで、理科の友人たちにも京大物理志望が増えつつあった。やっぱりあまのじゃくなのか、私はもともと物理志望をやめることにした。理科の私は大学で文学部にゆくわけにも行かず、どうしようかと、いよいよ進路と大学の決定に迷った。

私の下宿によって先生ご夫妻は生徒を止宿させるのにお慣れになったのか、あるいは、どうせ一度はぐうたら生徒を置いたのだから、一人も三人も同じことと思われたのか、私の四畳半の隣の八畳の部屋に同じ理科で私の友人でもある生徒二人を下宿させたのは、秋のことであった。I君とS君は私と違って真面目な勉強家で、大事な大学受験を控え、夜遅くまで勉強して私を驚かせ、そして焦らせた。I君はN大学の工学部志望、S君はK大学の農学部志望で、抱負を語りながら、おそろしい熱心さで勉強していた。私は子供のときから夜は10時に就寝することに決めており、他の人の生活スタイルを知らなかったのか、はじめ彼らもその頃に寝るのだらうと思っていた。ある日、奥様が、「IさんとSさんは随分遅くまで勉強しているようですよ。もうすぐ入学試験でしょう。あなたももう少し、お勉強なさったら」と忠告して下さった。下宿を始めた頃は先生のお説教を用心していたのに、この時期にはすっかり慣れて呑気になっていたもので、まさに晴天の霹靂の苦いご忠告であった。さすがの私も以後、睡眠時間を短縮し、多少勉強することにした。

案外、先生は私に「勉強せよ」などと直接に説教せず、最も肝要な科学の本質を教え、肝心の時に勉強家の友人二人を隣室に住まわせて、私を督励したのかも知れない。尊い我が師の恩である。かくして私は翌春、無事に旧制大学理学部に入学を許可された。M先生のお陰で、またと無い貴重な高校生活を送り、西洋史を介して学問の本質を垣間見る経験を得させて頂いた。

私が植物生理学を専門としながら、その発展の歴史をとくに十九世紀以来のヨーロッパにおける位置付けとの関連で考えることが出来たのは先生のご薫陶に負うところが大で、今更ながら感謝の念を深くしている。M先生、すなわち村瀬興雄先生は、今、成蹊大学の名誉教授で、80

歳を越した今もかくしゃくとしてご研究に専念され、そして私にあのきびしい苦言を下された心優しい祐子夫人も当時の上品な美しさをそのまま残して、健やかに暮らしておられる。(岩波書店「図書」12月号、20-23頁、1995)

「蔵書焼失」

亡父の三十五日祭をすませた昨年(1979年)7月21日、第10回国際植物成長物質会議に出席するため、何か気がかりのまま私はアメリカへ出発した。祭壇の線香が原因で出火し、留守宅が全焼した、という知らせを受けたのは会議第2日目、7月24日の夕刻であった。国際電話のやりとりで、とに角わかったのは、家族が無事であったこと、類焼がなかったこと、ガレージと車を除き、家屋家財を全焼したことであった。会議中の私の任務がすべて終わったわけではなかったが、主催者側であるウイスコンシン大学のスクーグ教授ら、あるいは他の日本人出席者らの強いすすめがあったので、会期2日を残し、私は7月26日早朝、マジソンを発ち、飛行機を乗り継いで27日夜、大阪に帰った。

焼けあとを目の当りにしたときの情けない気持ちは今でも忘れられない。私は少年時代、家財のすべてを残し、リュックサック一つで旧満州から引き揚げた経験をもつが、国が敗れ、日本人全部が裸になった終戦当時のことで、引き揚げの体験はとくに辛い思い出というほどではない。すべて焼けてしまった今度の火災は予期しなかった出来事であり、実にいまいまして、そして憂うつであった。ことに棚に真っ黒になって並んでいる本やレコードアルバムの惨憺たる有様は今思い出してもぞっとする。

私の蔵書は大別すると、一・単行本(和、洋専門書、辞書類および一般書)、二・専門雑誌(大部分は製本したもの)、三・論文別冊、であった。これら私物の蔵書を置くほど研究室は広くなく、また私はデスクワークは自宅でする習慣なので、蔵書の大部分を自宅においていた。このうち、一と二は書斎の木製書棚に並べていたが、数がふえたので、ちょうど火災のおこる二か月ほど前、廊下にスチールアングルを組み、幅約三メートルにわたって天井までの書棚を作らせた。この廊下の書棚には雑誌と、書斎に常時おく必要のない書籍を並べた。埃よけにつけたカーテンが不燃性でない安物の化繊だったのもまずかった。

焼けた家はカギ形をした鉄骨、コンクリートブロックの二階建てであった。奥の仏間にしていた和室から出火したが、火は壁の外へ拡がらず、隣近所へ被害が及ばなかったのは幸であった。そのかわり夏のことで、窓は開けており、火は廊下を通り、階段を煙突を通るかのように二階まで昇り、短時間で家の内部を燃やしつくしたらしい。このため、火の通り路になった廊下の書棚の運命はいうまでもない。

この火災の被害は三つに分けられる。一つはもちろんのこと火と熱である。二つ目は新建材などの燃焼による煤、三つ目は消防の放水による浸水の被害で、夏場だったため、あとで残った本の頁の間にカビが発生して困った。

私は本が焼けた、と書いたが、実は本はなかなか燃えないものだということをこの火災で認識したわけである。書棚に並んだ本の背は無残に焼けたが、酸素不足で中まで火が通らず、頁は意外な程無事なものが多かった。ただし、火や熱は上にあがるため、書棚の天井近くにおい